

# ボランティアで研究はできるか？

Research as a Volunteer

-ふくしま再生の会を事例に-

2013/01/31

農学国際特論 1 報告書

グループ 6

# まえがき

本報告書は、農学生命科学研究科農学国際専攻の講義「農学国際特論Ⅰ」の課題「ボランティアで研究はできるか？」の成果をまとめたものである。

飯舘村でお世話になりました「ふくしま再生の会」の関係者のみなさまのご協力に感謝いたします。

横川華枝

## 執筆担当者

新井 杏子 農学国際専攻 国際森林環境学研究室 修士1年

太田 毅人 農学国際専攻 国際水産開発学研究室 修士1年

ソニ 里愛 IPADS（国際農業開発学コース） 国際動物資源学研究室 修士1年

横川 華枝 農学国際専攻 国際情報農学研究室 修士1年

渡辺 玲央 農学国際専攻 国際森林環境学研究室 修士1年

## 指導担当教員

溝口 勝 農学国際専攻 国際情報農学研究室 教授

## 目次

---

1	序論	5
1.1.	研究とは何か	5
1.2.	科学者の社会への責任	6
1.3.	ボランティアで行う研究	6
1.4.	可能性と課題	7
1.4.1.	概観	7
1.4.2.	研究費	8
1.4.3.	人手	9
2.	事例	10
2.1.	調査団体の選定	10
2.2.	調査方法	10
2.2.1.	調査期間	10
2.2.2.	活動内容	10
2.3.	ふくしま再生の会	13
2.3.1.	ふくしま再生の会とは	13
2.3.2.	設立の背景と活動理念	13
2.3.3.	実施体制	13
2.3.4.	活動内容・実績	14
2.4.	飯舘村について	17
2.4.1.	飯舘村概要	17
2.4.2.	震災後の飯舘村	18
2.4.3.	原発事故から今まで	19
2.5.	ふくしま再生の会の研究活動	21
2.5.1.	研究費	21
2.5.2.	人手	22

2.5.3. モチベーション.....	23
2.5.4. 課題 .....	24
3. 結論 .....	25
4. 感想 .....	26
4.1. 新井杏子 .....	26
4.2. 太田毅人 .....	26
4.3. ソニ里愛 .....	28
4.4. 横川華枝 .....	28
4.5. 渡辺玲央 .....	29
5. 学生にできること .....	30
5.1. ディスカッション .....	30
5.2. 活動のきっかけ.....	31
5.3. 実際に行った活動 .....	32
5.3.1. 情報発信 .....	32
5.3.2. 英訳ボランティア（ソニ） .....	33
5.3.3. 原発事故と学生～東京から考える～ 発表（横川） .....	33
参考文献等 .....	35
おわりに .....	36

## 図表目次

図 1-1 現時代における科学的方法 .....	5
図 1-2 企業等の費目別研究費（平成 22 年度） .....	7
図 1-3 大学等の費目別研究費（平成 22 年度） .....	7
図 1-4 非営利団体・公的機関の費目別研究費の割合（平成 22 年度） .....	8
図 1-5 研究費の負担割合（平成 22 年度） .....	8
図 1-6 研究関係従業者数の推移[5] .....	9
図 2-1 放射線量計 .....	11
図 2-2 飯館村役場 .....	11
図 2-3 イネ作付試験 .....	11
図 2-4 除染作業のようす .....	12
図 2-5 稲刈りの手伝い .....	12
図 2-6 実施体制（筆者作成） .....	13
図 2-7 飯館村 空間放射線量マップ .....	14
図 2-8 GPS ロガー付き放射線量計 .....	14
図 2-9 各地域の深さ方向の放射線量 .....	15
図 2-10 モニタリングポスト .....	15
図 2-11 田車による代かき .....	16
図 2-12 飯館村の避難指示区域[8] .....	18
図 5-1 Facebook ページ .....	33
図 5-2 発表内容例 .....	34

# 1 序論

## 1.1. 研究とは何か

病気を治すための新薬開発、毎日の生活をもっと便利にする技術開発、環境を守る方法、人類の知識を深める新発見などが可能であるのは科学のおかげである。科学が進化するために研究は必要だが、具体的にどういった活動が研究として認められるかを定めることは難しい。

研究の目的は、①あらゆる現象の真実を明らかにすること、②新たな知識を引き出すこと、③現在の知識をもっと良くすること、の3つに大きく分けることができる。これらの目的を持つ研究は、科学的方法（調査手法）に基づいて行われる。仮説実証型の研究手法においては、仮説を立て、それを実験ないし調査を通じて検証する。結論が支持されない場合には改めて仮説を立て直し、再検証を行う。最終的に結論が支持されるまで、そのプロセスを繰り返す<sup>1</sup>[1]。

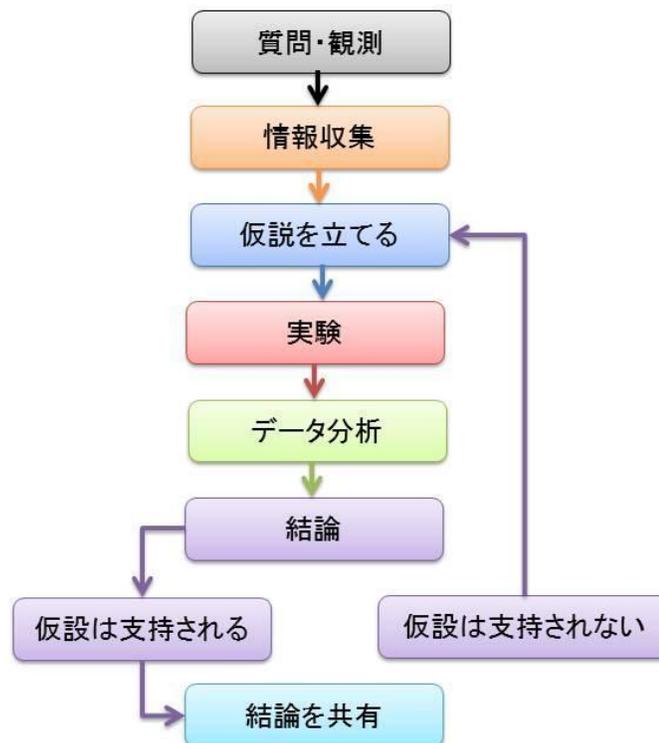


図 1-1 現時代における科学的方法

<sup>1</sup> 採用する方法や分析視点の重要性はそれぞれの学問分野やプロジェクトの内容によって異なる。常に従われるべき統一的な方式があるわけではなく、上記フレームワークは1つの指針として提示している。

さらに、再現性、外部からの批評・吟味、そしてデータや方法の共有をその他の重要な要素として挙げることができる。実験に基づいた研究の場合、結論は偶発的結果を回避し、同じ条件下で誰にでも再現可能な状態で提示されなければならない。査読は現代の専門的な熟練した科学においては標準となっており、科学社会に受け入れられるための研究であれば非常に重要である。研究者は原則として同じデータから、同じ結論へと行き着くことができなければならない。この査読は理論が確実な根拠のあるものかどうかを明らかにするが、結論が真実かどうかについての正当性は示さない。これは全てのデータがバイアスを減らすために注意深く、そして完全に記録され、全てのデータと方法が共有されて始めて可能になることである。

そのような基本的な原則に基づいた科学的研究であれば、妥当な研究として社会から認められる。研究の内容は恐ろしいほどに変わりえるし、また変わる。さらに、ある研究課題が非常に実践的である一方で、別のものは実践的な応用が少しもなく、自然界の知識の進歩を手助けするだけかもしれない。

## 1.2. 科学者の社会への責任

---

科学者に求められるものとして、研究活動の成果に加えて、一般市民に分かりやすい形で社会に貢献する必要性が指摘されている。

本来の研究活動から一步離れて行う活動を研究者の「アウトリーチ活動」という。例としては、社会的な問題に対して、メディアを通して専門家として説明すること、子供向けの科学教室や一般市民と研究者が交流するサイエンスカフェなどが挙げられる。

## 1.3. ボランティアで行う研究

---

### ①定義

---

本報告書において、ボランティアで行う研究とは、研究者が職業人としてではなく、一個人として報酬なく研究を行い、成果を出すことを意味する。

### ②実現の難しさ

---

恵まれた資金調達と多くの資源が利用できる状態で、専門的に確実な根拠のある科学を行うことは難しいため、ボランティアとして財政援助がなく、限られた資源の中で確実な根拠のある科学を行う困難は想像に難くないだろう。

### ③活動団体

---

NPO や NGO= 民間非営利組織に所属しているものとする。現在全国ではおよそ 47,798 の NPO 法人が登録されている [3]。しかしながら、職業を離れて研究活動を行い、研究成果を発表する団体は少ない。

次節からは、研究に必要な各要因について、ボランティアで行う際の可能性や課題を検討したい。

## 1.4. 可能性と課題

### 1.4.1. 概観

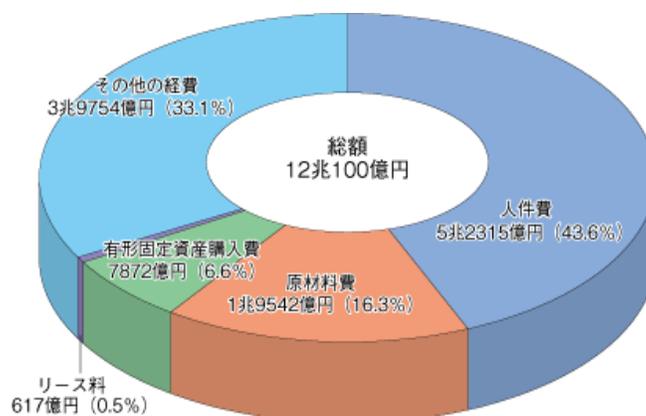


図 1-2 企業等の費目別研究費（平成 22 年度）

平成 22 年度の企業等の研究費を費目別にみると、人件費が約 4 割を占めている。

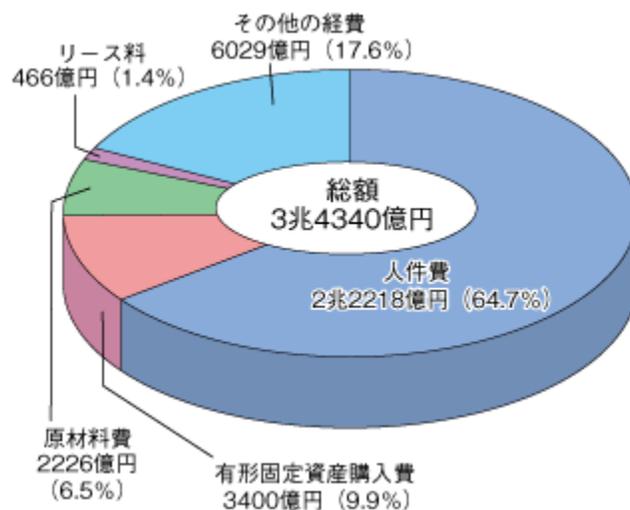


図 1-3 大学等の費目別研究費（平成 22 年度）

平成 22 年度の大学等の研究費を費目別にみると、人件費が約 6 割と大きな割合を占めている。

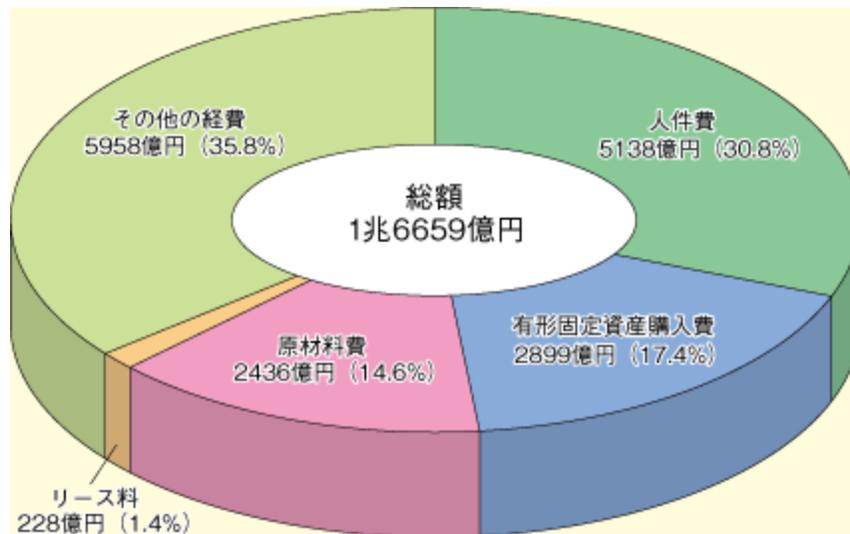


図 1-4 非営利団体・公的機関の費目別研究費の割合（平成 22 年度）

平成 22 年度の非営利団体・公的機関の研究費を費目別にみると、人件費が約 3 割を占めている[4]。

企業や大学、そして NPO の中での研究環境は、仮に同様のプロジェクトであっても、経営や利用可能な資源、そして信念の違いによって異なる。

#### 1.4.2. 研究費

主要な研究者がボランティアとして働くことを認めてもなお、ほぼ、全てのプロジェクトで、少なくとも物品費や旅費という形でいくらかの財源が必要である。独創的な実験計画によって費用は最低限度にすることはできるが、研究者が何かの外部の組織（政府もしくは非政府機関）から資金援助を受けない限り、自分の財布から実験費用を払わなければならない。これはボランティアとして研究を行っていくうえで厳しい妨げとなる。

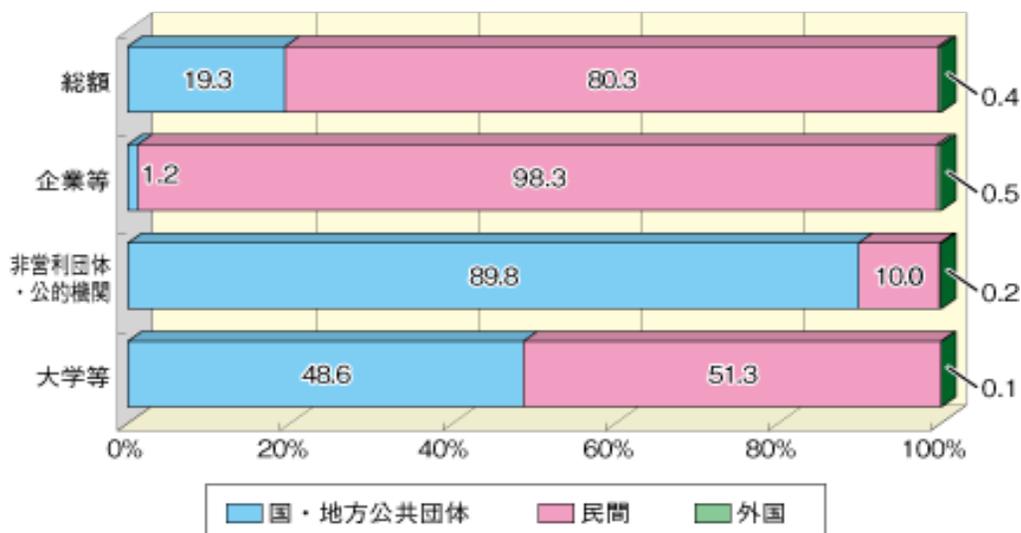


図 1-5 研究費の負担割合（平成 22 年度）

平成 22 年度の研究費を支出源別にみると、国・地方公共団体の割合が研究費全体の 19.3%、民間が 80.3%、外国が 0.4%を占めている。

### 1.4.3. 人手

#### ①研究者の数

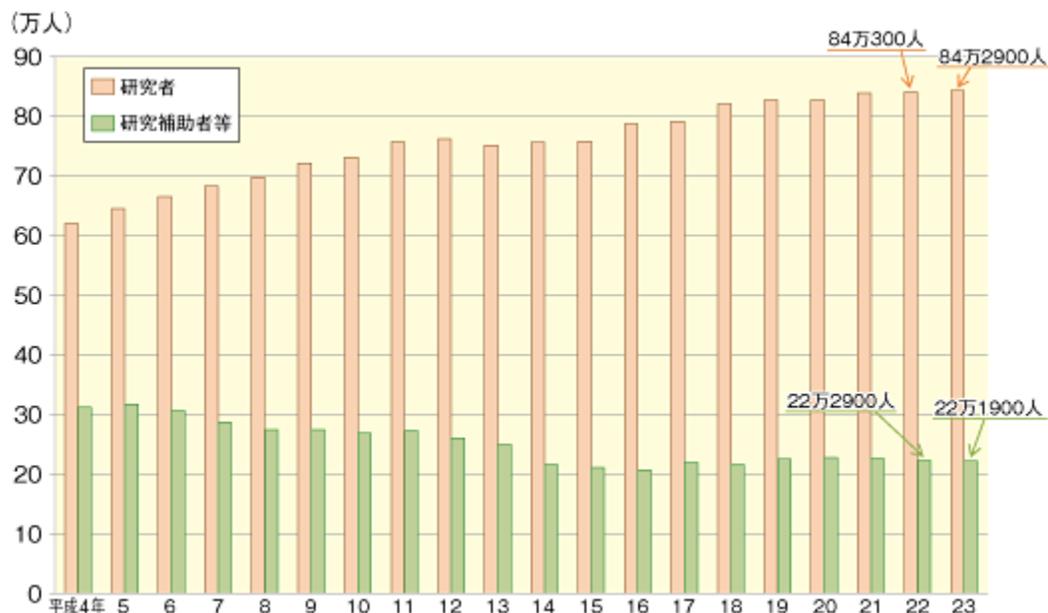


図 1-6 研究関係従業者数の推移[5]

研究者：大学（短期大学を除く）の課程を修了した者（又はこれと同等以上の専門的知識を有する者）で、特定のテーマをもって研究を行っている者を指す。大学院博士課程の在学者も含む。

研究補助者： 研究者を補佐し、その指導に従って研究に従事する者。

平成 23 年 3 月 31 日現在の研究関係従業者数は、106 万 4800 人となっている。

#### ②技術

科学や科学技術の進歩の増大によって、用いる手段や技術も増えた。これは典型的な実験を適切に行うために学ぶ技術がより多くなったことを意味している。研究を実施するためには、より技術に富んだ人材が必要である。

## 2. 事例

---

### 2.1. 調査団体の選定

---

本報告書では、ボランティアで研究活動をしている団体を調査対象とする。ボランティアと研究をキーワードに活動する場合、その多くが研究者・専門家による一般向けの科学教育、アウトリーチ活動を指すが、本報告書の調査対象ではない。

本報告書で調査団体を選定する条件として、次の3点を考慮した。社会的な課題を解決するためにボランティアで研究を行っていること、研究成果を出し、公開していること、継続して活動していることである。

NPO法人「ふくしま再生の会」はこの3点を満たしており、調査対象として相応しいと考えられる。ふくしま再生の会については、2.3で後述する。

### 2.2. 調査方法

---

福島県飯舘村で研究・調査を行うNPO法人「ふくしま再生の会」を対象とし、2回の活動参加とインタビュー調査を行った。

#### 2.2.1. 調査期間

---

2012年10月27-28日、および2012年11月17-18日の2回。

#### 2.2.2. 活動内容

---

飯舘村内の見学、ふくしま再生の会メンバーへのインタビュー、会の活動参加を行った。11月の訪問では、福島市内にて避難生活中の飯舘村民へのインタビューを行った。

##### ①村内の見学

村内を車で回り、文科省設置の放射線量計、自衛隊によって除染作業が行われた飯舘村役場、ふくしま再生の会が行う実験の対象地、除染作業地等を見学した。



図 2-1 放射線量計



図 2-2 飯舘村役場



図 2-3 イネ作付試験



図 2-4 除染作業のようす

②インタビュー

ふくしま再生の会メンバー5名、会の活動を追う記者、会の活動に賛助する方、避難生活中の飯舘村民にインタビューを行った。

③作業の手伝い



図 2-5 稲刈りの手伝い

## 2.3. ふくしま再生の会

### 2.3.1. ふくしま再生の会とは

ふくしま再生の会は、2011年6月に福島県飯舘村佐須を拠点として設立した、原発事故による被災者の生活と産業の再生を目指す団体である。被災地を拠点に、被災者と協働し、人々のくらしと産業の再生をめざしてさまざまなプロジェクトが行われている。

### 2.3.2. 設立の背景と活動理念

#### ①若者の力、シニアの経験を集め世界の被災地「ふくしま」の自然と生活の再生を目指す

ふくしま再生への道は多様であり、決して「国による除染・帰村」か「移住・再出発」か、という単純な二者択一ではないとしている。

#### ②放射能汚染と向き合う

地元の方々の再生への意志、知恵、経験、アイデアなどに、外部からの支援、放射能に関する専門知識、技術、アイデアを統合していくことによって活力が生まれ、再生の可能性が開けてくる。

### 2.3.3. 実施体制

ふくしま再生の会の実施体制は図 2-1 のようになっている。ふくしま再生の会は協力・提携期間と関係を結び、支援を得ている。ふくしま再生の会は放射線計測、放射能分析、放射線データアーカイビング、農地除染・農業再生、住居環境除染、ICT 運用の 6 チーム体制である。

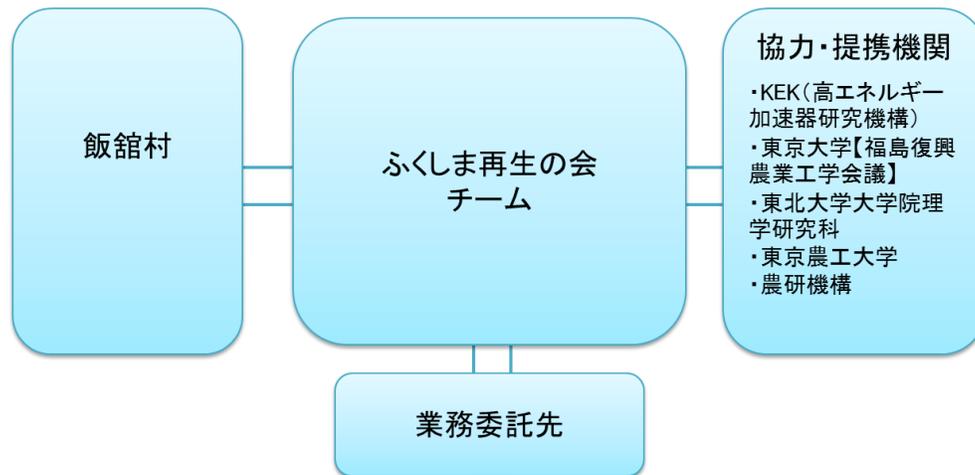


図 2-6 実施体制（筆者作成）

### 2.3.4. 活動内容・実績

ふくしま再生の会活動報告[6]より、ふくしま再生の会が行ってきた代表的なプロジェクトを紹介する。

#### ① 放射線測定

全村の放射線量マップを作成している。GPS とデータ送信機能付きの線量計を車に搭載して、月に 2 回程度全村を走る。2011 年 11 月に国が行った、航空機による空間線量の調査よりも、より居住区域に近い線量を計測することができている。

さらに図 2-3 のような携帯型 GPS 付き線量計（ふくしま再生の会で開発）を用いて、徒歩、自転車などの手段で計測した詳細なマップも作成されている。

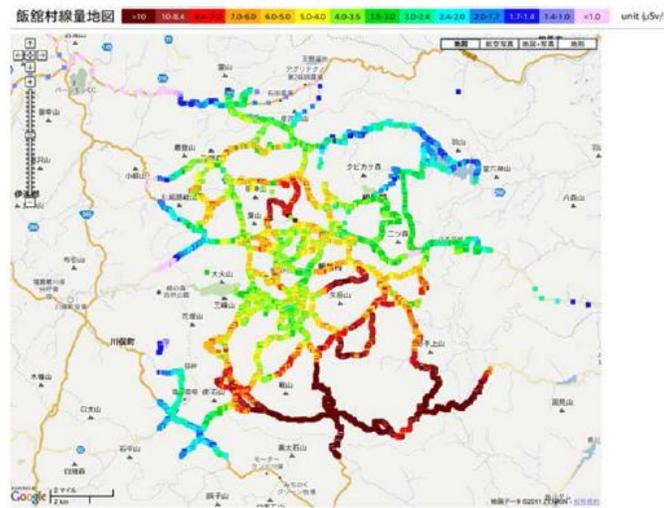


図 2-7 飯館村 空間放射線量マップ



図 2-8 GPS ロガー付き放射線量計

## ② 土壌放射線測定

土壌の深さ 5cm までにセシウムがほとんど存在するという研究報告がある（塩沢ら,2011 等）。村の 20 か所で、深さ 16cm までの 2cm ごとに土壌サンプリングを行い、放射線量を計測した結果が図 2-4 である。シニアボランティア測定隊によってサンプリングが行われた。

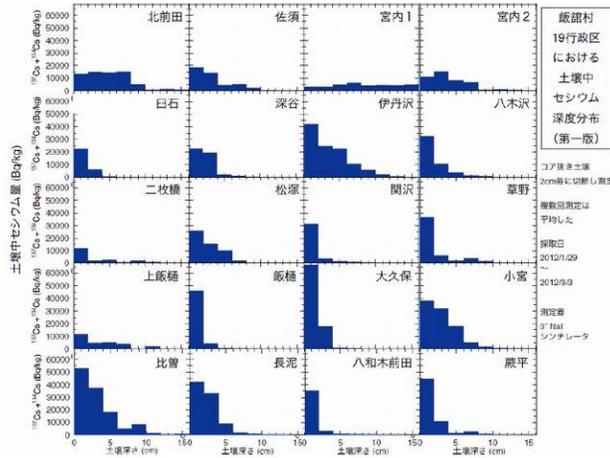


図 2-9 各地域の深さ方向の放射線量

## ③ 放射線、気象、土壌の観測

除染に適する時期を見極めるためには、気象と放射線量を関連付けることが重要である。図のようなモニタリングポストを佐須（菅野永徳さん宅、菅野宗夫さん宅、明神岳（2 台）、東北大学惑星圏飯館観測所の 5 か所に設置し、放射線、気象、土壌のリアルタイムモニタリングを続けている。

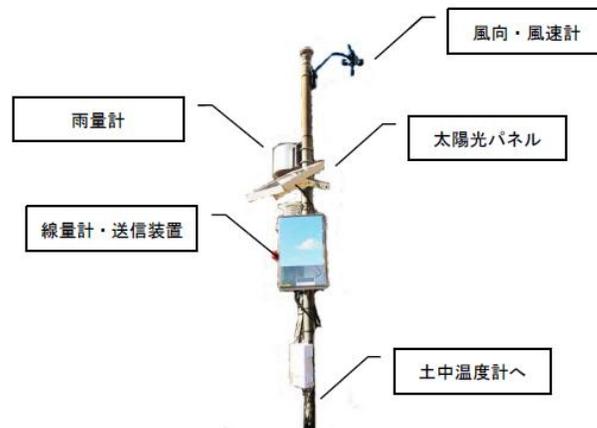


図 2-10 モニタリングポスト

#### ④エアロゾル放射能測定

---

空気を吸い込むことによる被ばくの程度を調べるため、空気に含まれるエアロゾルをサンプリングし、放射線量を調べた。その結果、年間で約  $0.17\mu\text{Sv}$ （年間安全基準  $1\text{mSv}$  の 5000 分の 1）の内部被ばくになると分かった。

#### ⑤除染

---

農地、居住環境、山林について、いくつかの除染方法が開発されている。同時に除染廃棄物の処理方法も開発されている。

##### 【農地】田車除染法

水を入れ、土壌表面を田車でかきまぜる（代かき）ことによってセシウムが吸着した粘土を泥水の状態にし、排水する方法である。



図 2-11 田車による代かき

##### 【居住環境】

裏山やいぐねからの放射線を軽減するため、木の枝を落としたり、雨によって土砂が降りてこないよう別に水路を作るなどの方法が考えられている。

##### 【山林】

落ち葉、腐葉土の掃き出しによって除染を試みている。

#### ⑥産業の再生

---

コメの作付試験やナタネ、イタリアンライグラスなどの燃料作物の栽培を始めている。新産業の支援も行う。

## 2.4. 飯舘村について

### 2.4.1. 飯舘村概要

飯舘村（いいたてむら）は、福島県相馬郡内に属し、福島県内の地方区分である浜通り・中通り・会津のうち、浜通り地方に位置する。1956年の誕生以来、半世紀以上にわたり市町村合併を経ることなく存続しており、2004年には、合併しない「自主自立」の村づくりを採択した。

飯舘村の第一次産業としては、水稻、畜産、葉タバコがあり、「飯舘牛」のブランド化の推進等が行われてきた。また、野菜に加え、花卉栽培が盛んであった。第二次産業としては、製造業4社のほか、縫製、建設企業の事業所が立地している。第三次産業は弱体化しており、サービス産業の育成と振興が課題であった。

総面積 23,013ha のうち 74.4%を山林が占める飯舘村内では、山や沢といった豊富な自然資源を生かした観光化が進められていた。また、村の特産品としては、野菜や花卉に加え、飯舘村産のコメを使用した吟醸酒やどぶろくが多くあり、村はどぶろく特区に指定されていた。

表 2-1 飯舘村の土地利用[7]

土地利用 【全面積： 23,013ha (100.0%)】			
水田	1,431ha (6.2%)	畑	1,122ha (4.9%)
宅地	85ha (0.8%)	山林	17,114ha(74.4%※うち国 有林 47%)
牧場	159ha (0.7%)	原野	1,665ha (7.2%)
その他	1,437ha (5.8%)		

## 2.4.2. 震災後の飯舘村

東日本大震災後の福島第一原発事故によって、村内が避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域の3区域に指定された（2012年7月再編）。

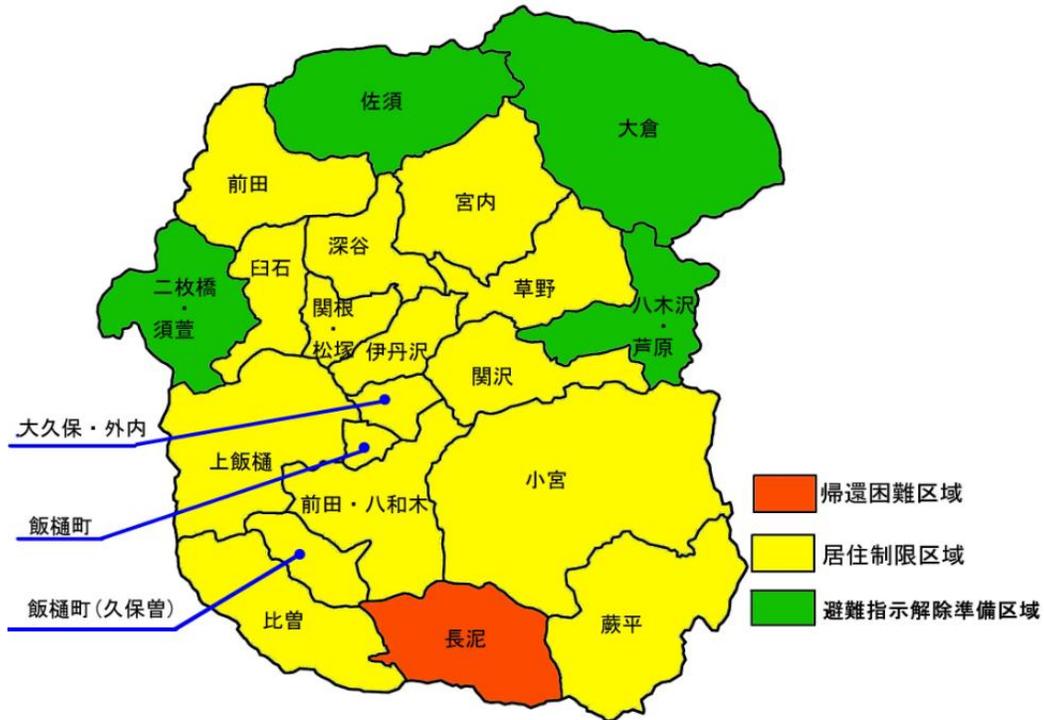


図 2-12 飯舘村の避難指示区域[8]

2012年12月1日現在、飯舘村の避難状況は下表のようになっている。

表 2-2 飯舘村の避難状況（2012年12月1日現在）

	避難人数	避難戸数
福島県外	514	295
福島県内	6059	2742
飯舘村内	100	95
全合計	6675	3134

（出所：飯舘村ホームページより筆者作成。）

飯舘村内は原則全村避難対象であるが、老人福祉施設が行政の許可を得て運営を継続しており、現在の入居者は88人（88戸）となっている。また、国勢調査に基づく飯舘村の現住人口は5945人（1689戸）である[8]。避難世帯数が本来の世帯数の2倍近くに達していることから、避難時に家族が離散したことによる世帯数の増加が読み取れる。

飯舘村役場は現在福島市内に機能を移転し、広報誌「広報いいたて」の発行や、震災以降の情報に特化したホームページ[9]の公開等により村内外の人々との情報共有が行われている。

---

### 2.4.3. 原発事故から今まで

---

2011年3月11日から2013年1月9日までの飯舘村に関する記事をまとめた。

#### ① 計画的避難区域指定と避難

---

2011年3月31日、国際原子力機関（IAEA）は飯舘村の土壌から1平方メートル当たり約2千万ベクレルの放射性物質（ヨウ素131）を検出し、「避難の必要がある」と指摘した。経済産業省原子力安全・保安院は、「避難区域の拡大にすぐつながるかは分からない」「もう少し検討する」との方針を示した[10]。

4月11日午前、政府は半径20kmの同心円ではなく、モニタリングの結果に基づいて精緻な分析を進めたうえで避難区域を拡大するという方針を示し、午後には飯舘村全域が「計画的避難区域」に指定された。5月下旬までに順次避難することが指示された[11]。

5月15日から、乳幼児や妊産婦のいる世帯を手始めに、月内に約5千人の村民を避難させる計画が始まった[12]。村は1カ月かけて約1千戸の避難先を確保したが、必要数の約半分であった。避難先の確保が難航し、5月31日時点で村民約6200人のうち1427人が残っていた。6月には9割の住民の避難が終了した。

6月22日、飯舘村役場は福島市役所飯野支所へ役場機能を移転し、開所式を行った[13]。

2012年7月17日、政府は飯舘村の要請を受けて、放射線量に応じて3区域に見直す方針を決めた。被ばく放射線量が年50ミリシーベルトを超え原則として立ち入りが禁止される

「帰還困難区域」、年 20 ミリシーベルト以下の「避難指示解除準備区域」、年 20 ミリシーベルト超 50 ミリシーベルト以下の「居住制限区域」に再編した[14]。

2013 年 1 月現在、飯舘村には、「いいたてホーム」の入居者を除いて住民は住んでいない。

## ②農地の汚染と除染実証実験

---

2011 年 4 月 12 日、福島県の調べで、浪江町と飯舘村の計 8 カ所でコメの作付け制限の基準（土壌 1 キログラム当たり 5000 ベクレル）を超える放射性セシウムが検出された。飯舘村は同日、今年の農産物すべての作付けをしないと決議した[15]。

4 月 22 日、政府によって飯舘村を含む、放射性物質が基準値を超えて含まれる水田でのイネの作付け制限が発動した[16]。

5 月 28 日、農林水産省と福島県は土壌中の「除染」の実証実験をスタートさせた。▽重機による表土の剥ぎ取り▽水田に水を入れ、土を砕く「代かき」をし、排水時に放射性物質を吸着▽セシウムを吸い上げる効果があるとされるヒマワリなどの栽培の 3 つの方法を試す [17]。

8 月 20 日、独立行政法人「農業・食品産業技術総合研究機構」の農村工学研究所（農工研、茨城県つくば市）は水田の土に残った放射性セシウムを除去する実証実験を始めた。固化剤を用いて表面からセシウムを含む数センチの暑さの土を固め、農機ではがすという方法である [18]。

9 月 28 日、飯舘村は村内の除染計画を公表した。住環境は約 2 年、農地は約 5 年、森林は約 20 年で終え、作業で出た放射性廃棄物は村内の国有林にコンクリート製容器に入れて仮置きすることなどを盛り込んだ[19]。

11 月 7 日、環境省は、国が除染する警戒区域と計画的避難区域での詳細な放射線量調査を始めた。居住地を中心に詳細な空間線量分布図を作り、除染実施計画の策定に役立てる[20]。

（2012 年 2 月 24 日に中間報告が行われ、2011 年 11 月 7 日～2012 年 1 月 16 日の調査の結果、飯舘村などでは年 20 ミリシーベルト以下の地域が比較的多かった。） [21]

12 月 7 日から、自衛隊による除染活動が本格化した。本格的な除染を前に、今後の除染活動の拠点とするため、高圧洗浄機や金属ブラシを用いて、飯舘村役場の除染が行われた[22]。22 日、地上 1 メートルの空間線量は飯舘村役場の芝地で毎時 4.39 マイクロシーベルトから 0.96 マイクロシーベルトに 78%低下したと発表された[23]。26 日、自衛隊は原子力災害派遣から撤収した。

## 2.5. ふくしま再生の会の研究活動

### 2.5.1. 研究費

ふくしま再生の会では第2章で紹介したとおり、数々のプロジェクトが行われている。ここでは活動に必要な経費がどのようにまかなわれているかについて、機材、サンプル分析、交通費等の諸経費をみていく。

#### ①放射線、気象、土砂の観測

まず、【放射線、気象、土砂の観測】プロジェクトの機材購入費について、プロジェクト責任者である溝口教授へのインタビューをもとに示す。放射線、気象、土砂の観測プロジェクトではモニタリングシステムを佐須（菅野永徳さん宅、菅野宗夫さん宅、明神岳（2台）、東北大学惑星圏飯館観測所の5カ所に設置している。

このモニタリングシステムのためのフィールドルータ、土壌・気象を測定する各センサーの購入費用は、表に示したプロジェクトの予算でまかなわれている。

ふくしま再生の会の活動は、三井物産環境基金の2012年度上半期活動助成（復興助成）案件、「福島県飯館村の生活・産業再生に向けた実験・実践活動」として助成されている。また、JSTの2012年度研究成果最適展開支援プログラム（A-STEP）復興促進プログラム採択課題、「被災地における除染モニタリングに向けた簡易モニタリングポストの新規開発および評価」として採択されている。

さらに、センサーのうち1セットは、農業農村工学会から借用している。これは、震災復興支援のために各センサーを取り扱っているアイネクス株式会社、Decagon社から農業農村工学会へ寄付されたものである。

表 2-3 プロジェクト名と用途

団体名・プロジェクト名	用途
明治大学 「震災復興支援・防災研究プロジェクト」	交通費 モニタリングポストの数台
「三井物産環境基金」 活動助成（復興助成）案件	モニタリングポストの数台
JST（科学技術振興機構） 「研究成果最適展開支援プログラム（A-STEP）」 復興促進プログラム	機材

## ② サンプルの分析

---

ふくしま再生の会が行っている放射能汚染調査、除染実験、イネの栽培試験などでは、放射性物質を含むサンプルの放射線量や放射性物質量を調べる必要が生じる。これらのサンプルを精細に分析するためには専門機関の技術や装置が必要である。ふくしま再生の会は次の2機関との協力関係をもつことによって、それを可能にしている。

- ・ 東京大学大学院農学生命科学研究科

飯舘村村長の菅野典雄氏による「飯舘村の農林業再生のための研究調査活動への協力要請」を受けて、東京大学大学院農学生命科学研究科は2012年10月から2014年9月の期間、活動内容に応じて協力することとなった。

ふくしま再生の会は飯舘村の農林業再生のための研究調査活動のため、放射線植物生理学研究室にサンプル分析を依頼している。

- ・ KEK（高エネルギー加速器研究機構）

ふくしま再生の会と協力関係をもち、サンプル分析を請け負っている。

## ③ 諸経費

---

ふくしま再生の会では、参加者の食費（お弁当）、交通費（新幹線、タクシー料金等）、宿泊費についてはほとんどが自身で負担することになっている。ふくしま再生の会を支援している「ふるさと体験スクール」に宿泊する場合は、ふくしま再生の会の会員価格で、通常よりも少し安価に宿泊することができるなど、支援の輪がある。

以上より、ふくしま再生の会の研究活動は、基金の助成、各プロジェクトの予算、専門機関との協力関係、参加者の負担等によって成り立っていることがわかる。

### 2.5.2. 人手

---

ふくしま再生の会は主に毎週土曜、日曜日に約十数人が飯舘村に集まり活動している。会のメンバーは有志であるため、メンバーのバックグラウンドや職種は様々である。研究者だけではなく新聞記者、IT会社社長、そして飯舘村の村民なども活動に参加している。参加人数は週によって変動するが大体10～20人程度であることが多い[24]。研究活動においては、職業として研究活動を行ってきた人材が専門的知識や技術を役立てている。

再生の会の活動はメンバーが平日は仕事などで忙しいため、主に毎週土曜日、日曜日に行われている。つまり月に約10日程度活動している。時間帯は個人によってまちまちであるが、早い人は朝8:00から夕方まで活動を行っている。また両日こられなくても、1日だけでも参加するメンバーもいる。このように、各人が限られた時間の中で、できる範囲の中で、会の活動に参加している。

※[24]再生の会の2012年6月～12月までの予定表から判断。また会員数は2012年6月時点で153名いる。

### 2.5.3. モチベーション

2度の現地訪問において、再生の会のメンバーを対象に聞き取りを行った。その際の語りから、活動を継続するモチベーションに関わる要素を整理すると、下表のようになる。

表 2-4 参加者のモチベーションの類別.

モチベーションの構成要素	語りの内容
同郷者としての共感	「同じ故郷の人間として何かできることはないかと思ひ参加している」
最先端のことをしているという自負	「除染に関しては最先端のことをやっているという自負がある」 「だんだんと実績（効果、成果）が出てくる」
人に必要とされる喜び	「こんなに自分が役に立てるんだって喜んでる人はいっぱいいるはず。役に立つ、必要とされるのが生きがいになる。」
自分たちの世代が責任を取るべきだという使命感	「若い人にとってはこれからの先の人生全部賭けるのは難しいと思う。年寄り自分たちの世代の後始末をしないとイケない。」 「はっきり言って、今の日本でこれより重要な問題なんてないと思ってる。」
新しい人間関係の楽しみ	「人間関係ができる。会うと嬉しい。楽しいこと、面白いことがないと続かない。地元の人にも楽しみにしてくださっている。」 「とても良い出会いで仲良くやれていると思いますね。この間も、稲刈りやってわーっとみんなでごはん食べたり。」
「現場に行く」という価値観	「沖縄の問題だってそうじゃない。当事者意識を持つとすればね、現地に行かなきゃ行けないの。問題意識を持った人は現地に行くのよ。」

メンバーの活動の基盤には、自らの専門性を活かして貢献することに対する自負と、極めて強い使命感がある。また、東北出身者の場合、地域への愛着から、継続して通い、経過に寄り添おうとする思いが見られる。

再生の会の特徴の1つに、核となるメンバーの年齢層（60～70代）が挙げられる。原発事故を自分たちの世代の「後始末」だと言い切るコアメンバー間のつながりは、大学時代の学生運動にまで遡ることができ、いきいきと語られる当時の思い出と現在の活動とをつなぐのは、時代の問題に接した際、まず現場に足を運ぶことを重視する彼らの価値観である。

メンバーのやりがいは使命感にとどまらず、協働する村民や、メンバー間での人間関係が大きな楽しみや喜びとなっていることも、聞き取りにおいて強く印象づけられた点である。

表 2-3 に示した各要素は複合的なものであり、1 個人のなかに複数の思いが同時に存在することで活動のモチベーションとなっているように思われた。

---

#### 2.5.4. 課題

---

##### ①再生の会が抱える課題（研究、ボランティア、組織の課題）

---

再生の会として活動の輪が広がるにつれて、事務局が多忙になり、人手が足りていない状況である。そのため、東京地区で事務局を手伝ってくれるボランティアが現在必要とされている。

##### ②活動者の苦勞

---

実際に再生の会に参加している活動者の苦勞として、ここでは除染技術の開発を試みている I さんのインタビューを例にとって述べる。

I さんは、ふくしま再生の会のプロジェクトの中で、新しい除染技術が開発できたとしても、その技術がすぐに飯舘村で大規模に適用されるとは限らないとしている。またすでに国から除染の方法が複数提示されており、長期スパンで作成された除染計画のもとにそれらの方法によって除染が進められている。より効率的、自然にやさしい、安価な除染技術の開発の必要性はもちろんあるが、それが実際に利用されるまでには多くのステップが存在するとし、そこに、技術の開発だけでは終われない難しさがあるとしている。

### 3. 結論

---

1.4において、ボランティアベースで「研究」を行う際の必要要素と検討材料を提示し、それらをふまえて、2.4では、ボランティア（非営利団体）として研究活動を行う「ふくしま再生の会」を取り上げた。以上の議論から、以下の条件を満たしていれば、ボランティアで研究が可能であると言えるのではないだろうか。

- ・活動に参加する十分な人数が確保できること
- ・研究に必要な資材を購入する予算・資金があること
- ・参加する個々人に動機、熱意があること

研究を実践する上で必要となる基礎的要素、すなわちヒト・モノ・カネの各側面において、再生の会ではそれらを的確にマネジメントすることで活動の継続を可能としていた。人手や財源の確保といった課題に加えて、実際に現場での活動を見学し、またメンバーに出会って必要と感じたのは、活動の動機づけである。再生の会の参加者は必ずしも東北に縁のある人ばかりではなく、そこで際立ってくるのは、東京近辺から遠路を経て毎週末集まるコアメンバーを支えるモチベーションの所在であった。聞き取りにおいては、強い使命感や危機感、同時に団体として地域に拠点を置きながら活動するやりがいと喜びが感じられた。

ボランティア活動の特殊性は、金銭的見返りを第一義的に求めない点にある。ボランティアとしての研究活動を考える際には、ハード面にとどまらず、参加者それぞれの思い、さらには活動を広げ、外部へとつなぐ役割も含めた人びとのつながり<sup>2</sup>といった、ソフト面の資源の確保も欠かせない視点であると言える。

---

<sup>2</sup>再生の会のケースでは、発起人である田尾氏の呼びかけによって、当初のコアメンバーの発足に至った経緯があるが、ボランティアな活動が立ち上がる背景、またその後の活動を通じたリーダーシップの所在等も活動の経緯と継続理由を理解する重要な要素であり、今後の課題であると感じている。

## 4. 感想

---

この章では、飯舘村のふくしま再生の会を実際に訪れ、再生の会メンバーや地元の方々にインタビューを行った、グループ6のメンバー各自が考えたこと、気付かされたことを示す。

### 4.1. 新井杏子

---

震災以降、主に東北沿岸部に足を運んでいた私にとって、全村避難の対象であるという飯舘村は、想像のつかない場所だった。それまでは、被災地と言われる場所を訪れると、たとえ街の姿は消えてしまっているとしても、そこには人の暮らしがあり、行く先々で人との出会いがあった。人がいない村で、どのように地域づくりが語られるのか。疑問を抱えて初めての訪問に臨んだ。

「飯舘には、目に見える被害がない」。村内での半日の活動を終え、再生の会の方々のお話をうかがっていた際に、津波被災地との違いとして挙げられたのが、目に見える被害、つまりはそこに足を運ぶ契機となるものがない、ということだった。津波による瓦礫をはじめとする物理的被害は、復興のために多くの人々の力を必要とする。再生の会は、飯舘村に拠点を設けることによって、他の被災地域に比べて「来にくい」飯舘村で人を受け入れられる環境を整えていた。

また、再生の会の活動にふれて関心を持ったのは、参加するメンバーの方々が現地を継続して訪れるモチベーションである。除染技術に関する自負や責任感、自分たちの世代の後始末という使命感だけでなく、飯舘の人々との週末の関わり、またメンバー内での交流も含めた、新しい人間関係の楽しみが、再生の会の大きな要素になっていると感じた。「人がいない」と思っていた飯舘村にも、人の姿があった。

震災復興プロセスへの参加は、「外部者」と「内部者」という明確な区分に基づいてなされるものではない。それぞれの立場で、それぞれのかかわりの濃さを持つ人々が地域に目を向けるそのまなざしの中で、当該地域のこれからがつけられていく。それは決して東日本大震災後の日本にのみ存在する現象ではなく、先進国と途上国、都市と農村、様々なスケールで入れ子状に存在するものだと考えている。「被災地」「被災者」「ボランティア」...多くの言葉が、震災をきっかけに身近なものとして存在するようになった。「被災地」とはどこなのか、「被災者」とは誰なのか、考えることを辞めずに足を運び、向き合っていきたい。

### 4.2. 太田毅人

---

インタビュー調査を通して最も記憶に残ったのが、O氏から聞いた、被爆者に対する差別やいじめが未だに存在しているという証言であった。このような差別は、放射線の人体への影響に関して、知識が足りていないから起きるものが多いという。このように、危険性を過大に評価した、根拠に欠ける知識までもが受け入れられてしまうのは何故だろうか。

その背景として、「放射線に関してどんな知識を信じて良いのかが分からない」という不安感が蔓延していることがあるだろうと、自分は考えている。

S氏が述べていたように、日本政府や電力会社が放射線や原発の安全性を強調し続ける一方で、他国政府や一部専門家は放射線の危険性を強調する。まして、飯舘に設置されている放射線測定器は、実測値よりも低い値が出る構造となっており、放射線値は過小報告状態になって

いる（10月の調査で確認済み）。このことはネット上などでも指摘されている。これでは、政府や電力会社が何か隠し事をしているのではないかと不安になる人がいても当然である。

そもそも、放射線が人体に与える影響について、臨床的なデータを集積することは非常に難しい。人間が今回の事故のような高い放射線に晒される事自体が稀でサンプル数は限られるし、人体実験を行ってデータを取る事も、当然許されないためである。

原発事故によって放出された放射線が人体に与える影響を知るには、チェルノブイリ事故など過去の事例を統計的に分析するなど、限られた方法しかない。そして、統計等の限られたデータを解釈する方法は、個人によって大きく異なってしまう。

例えば、チェルノブイリ原発事故による癌患者の増加に関しても、「小児癌のみが増加」というIAEAの公式見解もあれば「心臓病患者が増加している」とするYury Bandazhevskyのような見解もある。そして、両方の情報が、オンライン上で簡単に手に入る。例えば、反原発派として3.11以前から有名な田中優氏（立教大非常勤講師）も、オンライン上のインタビュー記事でBandazhevskyの意見を引用している。

それにも関わらず、日本政府は「安全」のみを強調する。そして自説に反する十分な説明をしていないように見える。もし、放射線の危険性が薄いと言うのであれば、日本政府や電力会社は、安全性の根拠として、「原発危険派」の意見を聞き入れた上で、国民が理解できる反論をするべきだ。例えば、上記のBandazhevskyの論文に関しては、論理展開などの面で穴が多いようで、論文の内容自体を批判することは難しくないように思われる。そこにしっかりとした反論を行えば、「放射線を危険視する意見にも穴があるのか」と安心できる人間は増えるだろう。逆に、十分な反論もせず無視を決め込めば、「政府は都合の悪い（放射性物質の安全性を否定する）情報を隠している」と勘繰る人間は出てきてしまうのではないかと。

まして、原発事故の後、多くの人に「原子カムラ」の存在が知られるようになってきている。原子カムラとは、電力会社、発電機メーカー、政治家、メディアなど、原発の建設・運営によって利益を得ているステイクホルダーの集合を指す。

調べてみると、確かに原発は巨額の利益を生み出すことが出来ると納得した。日本の電気料金は、「総括原価方式」という方法で決められているためである。これは「電力会社が発電に要した原価に一定（約3.5%）の利益を上乗せして電気料金を徴収して良い」というものである。つまり、コストをかければかけるほど儲かるということだ。そして、原発のコストは高い。正確に言えば、発電コストはそれほど高くなくても、核廃棄物の後処理、広告費、寄付金等の雑費が非常に高い。結果として原子力「発電」は低コストと謳いながら、実際の電気料金をかさ増しすることが可能となる。そして、施設設置費用としてメーカーに、広告費としてメディアに、寄付金として自治体や政治家に、巨額の利益が生まれる。その構造が、一般にも広く知られてきた。

このような状況で、メディアを通して電力会社や政府が原発の安全性を強調し、危険視する意見についての言及を怠れば、国民から不信感を買う可能性は高い。

放射線への理解を促すには、まず、放射線への説明を納得できる形で示すこと。放射線への説明で納得を得るには、相手が信頼できるデータの示し方をする事。相手に信頼して欲しけ

れば、隠し事をしている印象を与えないこと。隠し事をしている印象を与えないためには、自分に都合が悪いことも、正直に話すこと。

政府および電力会社に、差別に苦しむ人々を救うつもりがあるのであれば、放射線の「危険性」について、国民が理解できる形での説明をしていただきたいと、私は考える。

以上が、飯舘に行った私の、一番の主張である。

### 4.3. ソニ里愛

---

日本に留学したいと口を開けた時、両親や友達にもものすごく反対され、日本についてあることもないことを聞かされた。行かないでほしい理由の中で一番大きかったのは、これからも地震が続くことと原発の影響だった。日本で暮らしたら将来無事に子供を産めなくなるかもしれないと母に心配され、原発事故が起こって数ヵ月後沖縄に配置されてる弟ががんになったと友達に注意された。日本へ行くことはまるで身を危険な環境に置くかのように大げさにされた。

来日する前に Facebook で誰かが「Read this and restore your faith in humanity≒これで人類に信頼が戻る」という記事をアップロードしてて、その中ですごく感激的だった一件が「Retired scientists work on cleaning up the nuclear mess so young people don't have to」だった。団体の名前は書いてなかったがおそらくそれはふくしま再生の会のことだったと思う。「素敵だなー」って心から思った。人間は社交的な動物でありながら自己保存の本能が元でさもしい生き物であるはずだが、一人ひとりに愛他主義なところがあると私は信じている。人はなぜボランティア行為をするのかをもっと知りたくてこのグループに参加したいと思った。

実際に現場を訪れ、ふくしま再生の会の方々と原発事故の影響で避難している方の話を聞くうちにいつの間にか理論哲学はどうでもよくなり、なんとかしてあげたい気持ちに変わった。飯舘村は自然に恵まれとても素敵な場所だったけど、建物や動労に全くダメージがないのに人影も見かけないのは少し気味が悪かった。放射線は水や風で簡単に流れてしまい除染するのは無理に近いのではないかと思っていて、村に関係のない人達がなぜ毎週末集まるかわからなかった。

再生の会のコアメンバーを取材すると「ゴールが見えなくても、目の前の課題が大きすぎてもとりあえずやってみるしかない」と M さんに言われ、励まされた。

### 4.4. 横川華枝

---

インタビューのために飯舘村のふくしま再生の会を訪れてから、ふくしま再生の会に関する仕事がいくつかめぐってきて、私の研究室での仕事が増えた。本来の研究活動とは関係が薄いものだが、時間を割いて心から手伝おうと感じたのは、ふくしま再生の会の人々とお会いして得たものが大きく作用していると思う。

顔も知らない人のことを遠く離れたところから想うことは、当然ながら難しい。私は震災以降、特論で飯舘村を訪れるまで、被災地を訪れたことは一度もなかった。ニュースなどで被災地や被災者の方々に思いをはせることはあっても、どこか実感がなく、すぐに日常の中で埋もれていってしまった。

結局、飯舘村を訪れて、目で見て人と話して、それまで想像に過ぎなかったものが、やっと実感を伴った。私は、被災地、被災者が実在しているという当たり前の感覚を持てたことが、

何より意味があったと思う。想像しただけで分かったような気持ちになっている頭でっかちには、こうした経験が必要である。

被災地や被災者の存在を意識するようになると、なにかできることをしたいという気持ちが強まった。ふくしま再生の会は、なにかしたいという思いを叶えられるプラットフォームだ。会を訪れるどんな人にもできる仕事がある。

私にもできる仕事として、東京大学農学部の「サークルまでい」というボランティアサークルで、ある実験の指導を行った。このサークルは東京大学の教職員で構成されており、「震災復興のためになにか手伝いたい」という気持ちから結成された。サークルまでいは、時にはふくしま再生の会のプロジェクトのために、手間のかかる放射線検査用のサンプル作りや簡単な実験を請け負う。昼休みや就業後の時間を使って、ボランティアで作業を行う。こんな風にふくしま再生の会を通じて、たくさんの人がなにかしたいという思いを行動に移すことができている。

ふくしま再生の会に関わる人々の思いと数々のプロジェクトの実績が、どんな風に実を結ぶのか、これからもじっくり見ていきたいと思う。

#### 4.5. 渡辺玲央

---

ボランティアで研究はできるのかという、いまいち自分の中で消化し切れない課題を抱えながら再生の会の活動に参加した。飯館村の再生の会の本部がある、村民の住宅では自分の父より年上の方々が熱く、一生懸命に、でも楽しみながら議論や作業をしていた。僕はその姿を見て自分もこういう働きができる人間になりたいと感じた。今の自分は20代前半で若々しい年代まっさかりなのに、もしかしたらというか確実に彼らのほうが僕よりエネルギーに生き生きとしていた。それに驚きと若干の悔しさがあった。

会に参加する動機も、同じ東北の同胞という意識から参加する方、自分の励みになるからという方というように人それぞれであったが、一人一人が自分のできることを最大限に発揮しながら会に参加しているということは共通しており、組織として一つにまとまっていたように見えた。

また再生の会の大きな特徴として村民と協力しながら働くという姿勢が挙げられる。この協働の姿勢は現在国が行っている復興の事業に足りないものであり、これからの公的な復興の事業にも会の経験が活かせるのではないかと感じた。地域住民の意思を汲み取るという面でもこれからますます会の役割は増していくと考えられる。また会のあるメンバーがおっしゃっていた、外から来た会のメンバーと村民とが協力して働くことによって、新たなものが生まれているということについて、協働することの重要性にも繋がると思うので、今回の調査では明らかにできなかったが、もっと詳しく調べていきたい。

## 5. 学生にできること

---

### 5.1. ディスカッション

---

今回のグループワークにあたり溝口先生の意向として、飯館に対して学生が出来る貢献方法を考えてほしいというものがあった。

その後、学生同士で **Discussion** を続ける中で、原発や放射能に対する情報の不足、曖昧さが、多くの人々の不安を煽っているという指摘があった。そこで、飯館村を実際に訪れた立場から、感じたことや考えたことを発信することに行きついた。

その後の話し合いで、学生、若者の強みとして、各種 **SNS** を駆使してネット上で情報を得たり公開したりできる人間が多いことが挙げられた。また、飯館村に入れる人間自体が限られている現状、自分達が見聞きしてきた事実を伝えるだけでも価値はあると考えた。以上のような流れから、我々の飯館での経験を広く発信することに意味があるという結論に達した。

#### 【参考：関連する議事録のまとめ】

第二回 溝口先生から「飯館村の現状を知った上で、学生に何が出来るか考えてほしい」

#### 第三回

- ・原発に関する公表データがバラバラだから不安を煽るのではないかな？
- ・研究者と一般人をつなぐ必要があるのでは？
- ・一般人が知りたい事に対して研究者（や学生）が **web** 上で答えられれば良いのでは？

#### 第四回

- ・ボランティアに関わっている研究者やメンバーと接して得たことから提言すればいいのではないかな。
- ・みんなが行けるところではないから、行ってわかったことを伝えることができればいいのではないかな。（防護服の用意が必要かなど）
- ・飯館村には意外とボランティア団体が入っていない。
- ・飯館村の今を伝える場所が実はないのかもしれない。
- ・研究者、除染を行っている人の思いを伝えたい。彼らの存在を知らせたい。
- ・感情的に思いを発信するのではなく客観的に事実を伝える。専門家のいうことをわかりやすく伝える翻訳者として、自分の立場を主張しないで事実を伝えることだけする。
- ・まわりの学生に飯館の現状を伝える。
- ・東京の大学生に、地方と中央のずれから起きている問題を伝えて、再び繰り返されることのないようにしたい。
- ・独自ホームページで発信する。
- ・国際の発表でのみ行う
- ・**facebook**（再生の会）の1ページや再生の会のホームページはどうか

## 5.2. 活動のきっかけ

---

飯館に対して学生が出来る貢献方法を考えることは最初からグループ内の課題であった。しかし今回我々が飯館村に訪問したことによって、我々は「学生にできることはないか」とより考えるようになった。ここでは、そのきっかけになった会のメンバーの言葉をここではそのまま紹介する。

[学生] 学生に求めること、もしくは出来ることのアドバイスをいただければ嬉しいです。

[メンバーA] 「来たい人がいたらどんどん連れて来てほしい。そして情報を発信してほしい。地域から発信する広がりがある。チャンスがあれば来たいと思っている人はいるはず。だからこういうところがあるから行きましょう、となれば良い。」

[メンバーB] 「この状況をぜひ知ってください。1回見てもらえば、今までと情報の見え方が違ってくる。昨日までのメディアの受け取り方とは違うはずですよ。それと、学生さんにはやっぱり勉強してほしい。あんまり多くを期待してはいけませんよ。この状況は多分そんなに簡単に解決しない。何十年もかかりますよ。」また Bさんは正しくこういう事態を見られる目を持った人が必要だとも語っていた。

以上のようなメンバーの言葉から、我々の中で、自分たちが再生の会の活動に参加した経験を発信、伝えることが重要なのではないかという議論がおこった。

【Sさん（児童向けの旅館を建設した矢先に被災。現在、宿はボランティアスタッフらに利用されている。）】

「日本国から出る放射線量データに不信感がある。アメリカの資源エネルギー庁は世界の放射線量を監視しており、3.11の二日後には原発事故放射線量の汚染情報をネットで公開していた。米国民には80キロ圏外に脱出するように指示が出たし、さらにフランス政府は国外脱出命令も出た。そんな中で、日本政府の見解は「ただちに健康に影響は無い」。放射線量の測定方法や言っている事もいい加減で、隠蔽体質を感じてしまう。

→日本政府や電力会社が放射能問題に関して主張する「安全」の定義や、放射線量に関するデータが、他国や大学などの測定値（さらにインターネット上の情報など）と著しく乖離している。このことで、実際に、放射能の安全性に関する不安感が煽られている人がいる。（このような不安意見はインターネット上などでも散見され、政府や電力会社からの安全性に関する説明が一般に十分に理解されているとは言い難いと思われる。）

「多くの人に、福島現状を知ってもらいたい。福島の問題は過去のものになっていて、メディア露出も少ない。現状を広める若者が増えてくれたら…今回の件を風化させないで欲しい。」  
→情報を広める有効なツールとしてオンラインのSNSが挙げられるが、現代の学生の多くはSNSなどで日本各地にネットワークを持つ。情報を多くの人に伝えるという意味では、学生にも貢献が可能である。

【PTA 会長：O さん（今は福島市在住、被災時飯舘村在住。小 2～中 2 までの 4 人のお子さんを  
持つ。）】

（放射線に対する意識）

「小さい子供を抱えている人は、放射線を心配している。それゆえに、放射能に関する知識も「危険派」に偏りがちであった。去年の混乱期の親御さんたちには鬼気迫るものがあった。飯舘村との村境近くに仮設校舎を建てる、という学校からの村からの説明会など、罵声も飛び交った。しかし、結局、現状で子供は川俣町の飯舘寄りの方に位置する仮設学校に、バスで一時間かけて通っている。児童数は 150~160 ほど。中学は 70~80 で、幼稚園児は少ない。ちなみに、県外避難者はあまりいない。

混乱期が解けて行ったのは、個人個人が勉強したから。何かエポックになる出来事があったわけではない。以前は、意見の押し付け合いで軋轢が出たが、最近は「強制しない」雰囲気が出来てきた。極端な考え方の人は既に県外に出ている。月に数回、親が我が家に帰宅している。自分自身は家族でお墓参りに行く程度。いま室内で 1  $\mu$ シーベルトくらい。

色々な話が出てきていて、噂として根付いている。それを覆すものを示さないと、納得は得られない。」

→放射能に関する情報の不信感から、混乱や対立が起きている。

（若者に求めること）

「放射能問題で避難中の飯舘村民に関して、子供がいじめられた、結婚が破談になった、と言う話を実際に聞く。先日、国際放射線防護委員会（ICRP）主催のダイアログセミナーというのが福島であり、その場でも避難者差別の問題が扱われていた。ちなみに、セミナーのテーマは教育だった。いわれなき差別をなくすためにも、人々にはしっかりと知識を持ってほしい。若者たちには、福島の子供たちがイジメや差別に合わないよう、多方面に知識を広めてほしい。」

→現状として、放射能問題に関して差別を受け、苦しんでいる人が存在する。その差別が科学的に整合性のない知識に基づくものであれば、情報発信によって差別を緩和することは可能であり、実際にそれが求められている。

## 5.3. 実際に行った活動

---

### 5.3.1. 情報発信

---

この講義をきっかけとして飯舘村とふくしま再生の会を各々が 1 回以上訪れた。ひとりひとりが見たこと、聞いたこと、感じたことを情報として発信するため、思い思いの記事を書き、facebook をプラットフォームとして公開する予定である。

参照 URL: <http://www.facebook.com/tokuronG6>



図 5-1 FACEBOOK ページ

### 5.3.2. 英訳ボランティア (ソニ)

ふくしま再生の会を訪問したとき小川さんの言葉が一番印象的だった。学生に何ができるかと聞いてみたら、飯舘村に来て自分の目で見ることで十分とできれば情報発信をしてほしいと答えが出ましたが、最後に小川さんがこういった「意地悪を言うつもりはないけど、あまり期待してない（学生さんはやっぱり勉強してほしい。この状況は多分そんなに簡単に解決しない。何十年もかかりますよ）」。できることがなくても責任感なくていいよとやさしい意味が含まれたのかもしれないが、そんな風に言われて正直少しショックだった。なにもできなくて悔しかった。本当に私にできることはないのか？私にしかできないことはないのかと考えて会話が続く中で再生の会のウェブサイトの英語版の更新が遅れてるという話が出た。あっ、それだ！と思った。英語がネイティブの私にとってふくしま再生の会のサイトの英訳をするのがぴったりだ。原発からの被害、福島の実況、再生の会の感激的な活動を日本だけではなく世界中に広げたいという気持ちを実現できる方法はこれしかないと思った。

実際にやってみたくて言ったら英訳の課題を渡され、英訳文章の審査の上 2012 年 12 月から再生の会の英訳チームに参加することになった。専門用語も知らず、日本語にあまり自信がなく、良くできるかどうかは不安だがやってみるしかない。やる気があればやることは絶対見つかる、技術的な分野でも人それぞれの長所を生かせると思う。

### 5.3.3. 原発事故と学生～東京から考える～ 発表 (横川)

#### ① 「原発事故と学生～東京から考える～」

2012 年 12 月 1 日、東京大学農学部中島ホールにて「原発事故と学生～東京から考える～」という学生主催のイベントで、ふくしま再生の会を紹介した。さまざまな学部から学生が集まって、農作物への放射性物質の移行、原発事故に応じて SNS がもたらした影響、社会の中の科学者のふるまい、原発事故をうけて工学部がなすべきこと、原発事故後の農業の実態、など

文理問わず多岐にわたるテーマで発表するイベントであった。発表者、聴講者ともに学生を中心としており、学生同士で原発事故についての考えを深めることが目的である。

## ②発表内容

特論グループとして、ふくしま再生の会の活動の雰囲気を実際に伝え、現地を訪れたような身近な感覚をもってもらうことを目的として発表した。発表の冒頭で、インターネットを使って5分間ほど飯館村での活動の様子を生放送し、現地で働いている最中のふくしま再生の会のメンバーからメッセージをいただいたり、理事である菅野宗夫さんからの学生へ向けたメッセージを上映した。また、グループのメンバーが現地を訪れて感じた、ふくしま再生の会の印象を述べた。

アンケートでは、「メディアでは原発事故に関してネガティブなイメージ（「かわいそう」など含め）が流れていて、とても辛い、大変な印象しかなかったのですが、明るく、楽しく、汚染除去している活動も見られ、前向きでポジティブな事実も知れて良かったです!）」というコメントがあり、厳しい現実を受け止めながらの明るさ、前向きさを伝えることができたのではないかと思う。

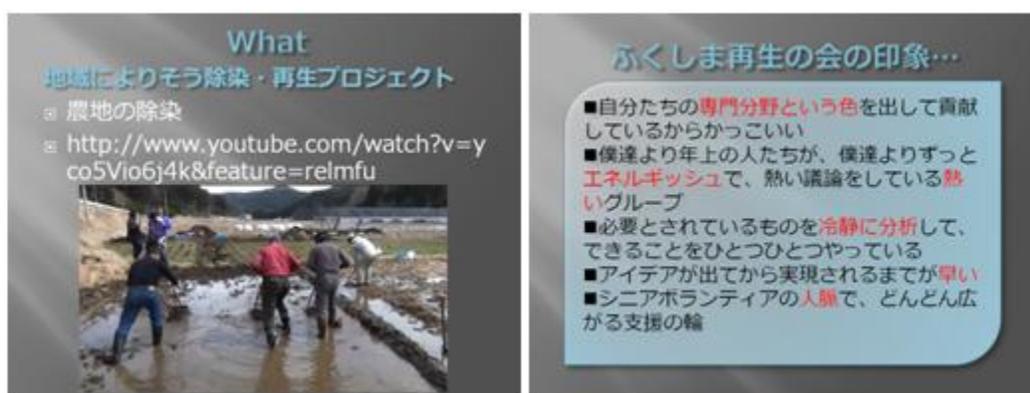


図 5-2 発表内容例

## 参考文献等

---

- [1] [http://en.wikipedia.org/wiki/Scientific\\_method](http://en.wikipedia.org/wiki/Scientific_method)
- [2] <http://oncallscientists.aaas.org/support/Policies.aspx>
- [3] [www.npo-hiroba.or.jp](http://www.npo-hiroba.or.jp)
- [4] <http://www.stat.go.jp/data/kagaku/pamphlet/h-01.htm>
- [5] <http://www.stat.go.jp/data/kagaku/pamphlet/s-04.htm>
- [6] 福島再生の会活動報告 <http://www.fukushima-saisei.jp/pdf/report20120610.pdf>
- [7] いいたて村までい企業組合ホームページ <http://iitate-madei.com/village01.html>
- [8] 2012年10月1日現在、飯舘村ホームページ
- [9] <http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/>
- [10] 保安院、I A E A 助言「しっかり受け止めて検討する」（日経新聞電子版 2011/3/31 12:30）
- [11] 原発 20 キロ圏外に「計画的避難区域」 飯舘村など対象（日経新聞電子版 2011/4/11 16:47）
- [12] 飯舘村、15 日から計画避難 住民ら悔しさこらえ準備（日経新聞電子版 2011/5/14 12:08）
- [13] 福島・飯舘村、役場引っ越し完了 村長「早く戻れるように」（日経新聞電子版 2011/6/22 1:20）
- [14] 飯舘村、帰村なお遠く 「居住制限」など3区域に再編（日経新聞電子版 2012/7/17 3:30）
- [15] コメ作付け、避難3区域外は「可能」 福島県土壌調査（日経新聞電子版 2011/4/12 22:32）
- [16] コメの作付け制限、12 市町村 7000 戸の農家が対象（日経新聞電子版 2011/4/22 12:30）
- [17] 農地の放射性物質、福島で除染実験 試行錯誤続く（日経新聞電子版 2011/5/29 1:46）
- [18] 飯舘村の水田でセシウム除去実験開始 コスト低減課題（日経新聞電子版 2011/8/20 12:10）
- [19] 住環境2年、農地は5年 福島・飯舘村が除染計画（日経新聞電子版 2011/9/28 19:41）
- [20] 空間放射線量の詳細調査を開始 国が飯舘村で（日経新聞電子版 2011/11/7 20:15）
- [21] 警戒区域の線量、最高値年 470 ミリシーベルト 環境省調査（日経新聞電子版 2012/2/25 0:51）
- [22] 福島の除染本格化 自衛隊、高線量地域に（日経新聞電子版 2011/12/7 15:30 更新）
- [23] 線量最大 78%低減 自衛隊除染の警戒区域など（日経新聞電子版 2011/12/23 3:30）
- [24] 再生の会の 2012 年 6 月～12 月までの予定表

## おわりに

---

紅葉の飯舘村を訪れてから、早くも2ヶ月が経とうとしている。今の私たちが訪問前と大きく違うのは、飯舘という地名を身近に感じ、連日メディアを通じて報じられる除染の問題を、より具体的イメージを持って考えられるようになったことだろう。「被災地」のなかでも訪れる人が少ない飯舘村に、今回こうした機会を得て足を運べたことに、大きな感謝と、自分たちなりに経験を消化し、共有していく責任のようなものを感じている。

「学生にできること」として、身近なところからの発信を試みたことを終章で述べた。本グループワークを契機として、今後も継続して関心を注ぐとともに、より見聞きし、足を運び、学ぶことを大切にしていこうと思う。

「年寄り自分たちの世代の後始末をしないと」と、再生の会の「アラ古希」メンバーは語っていた。震災後を生きていく私たちの世代は、被災地とともに歩みたい。